

### 37 マネはジョルジョーネ作品を理解していたか

#### 《田園の合奏》・《草上の昼食》

2020

真鍋友範



《田園の合奏》

1509



《草上の昼食》

1863

#### 1 ジョルジョーネの《田園の合奏》

まずは、ジョルジョーネの《田園の合奏》とはどのような作品だったのだろうか。<sup>1</sup>

ジョルジョーネは早逝の天才画家であった。活躍した年数は短く、作品数も不明確だ。

何故なら、理由の一つだが、彼の工房には後の大物画家ティツィアーノが在籍し、師匠であったジョルジョーネ急死期の未完成作品を完成させていたからだ。つまり、師匠のジョルジョーネと区別のつかないほどの良い完成作を師匠亡き後に世に出していたのだ。

当時は工房として外注依頼を請け負って制作したので、例え、ほぼ全体を弟子が担当しても工房名つまり師匠名の作品であったのだ。この《田園の合奏》も近年の美術史上の議論アイテムになっている。

この作品は、ジョルジョーネ作品だ。（詳しい根拠は脚注1参照）

---

<sup>1</sup> この作品をジョルジョーネとする根拠は、ウェブ上の論文 12 《田園の合奏》は誰の作品か 2019 真鍋友範 をご参照ください。

ジョルジョーネ作品であることを示す重要な根拠は、作品の多くが【追悼画である】点だ。

例えば、《テンペスタ・嵐》、《牧童の巡礼》、そしてこの《田園の合奏》、故郷の貴族から注文された《カステルビアンコ追悼画》などは共通して、《追悼画》なのだ。<sup>2</sup>

そして、その重要な表現上の証拠は、【依頼された追悼対象人物の顔を、【意図して暗く不鮮明に描く】】という点なのだ。

《嵐》の中の【左側の兵士】も、《羊飼いの巡礼》の【中央の羊飼いの男】も、《田園の合奏》の中の【弦楽器を引こうとしている貴族風の男】も、また《カステルビアンコ追悼画》の中の【鉄兜を被った若い兵士】も、全てもう亡くなった後で、注文された【追悼画】だ。

何故、【意図的に暗く不鮮明に描く】のか。依頼されたジョルジョーネは追悼される人物の顔を知らない。似てない人物の顔を描くより、【意図して暗く不鮮明に描く】方が、遺族にとっては、追悼される人物のイメージを重ねる上で都合が良いのだ。

当時の裕福なヴェネチア貴族からは、このような追悼画依頼がジョルジョーネに対し発生していたが、ジョルジョーネの早すぎる死によって、【追悼画ブーム】は幻のブームとして短期間に終わったのだと推察できるのだ。

《田園の合奏》は音楽好きの故人を偲ぶ、ヴェネチア貴族から注文された【追悼画】であったと考えられるのだ。

その画面は、合成された二つの世界からなる。

つまり、「田園の合奏」は故人が裸のヴィーナスと共にいる【天上界】と、牧童のいる【地上界】の合成画面なのだ。ジョルジョーネの天才ぶりは、まさに、この【近代的な画面合成を、なんと15世紀のルネサンス期に行った】という点だろう。

- 2 マネの《草上の昼食》はジョルジョーネの《田園の合奏》へのオマージュ作だろうか。

では、マネの《草上の昼食》を、ジョルジョーネの《田園の合奏》と

---

<sup>2</sup> 34 ジョルジョーネの画面合成技法 2020 真鍋友範

比較してみよう。



- ① 画面構成から見ると、明らかにマネの《草上の昼食》は、ジョルノジョーネの《田園の合奏》を下敷きにした構図だ。

前景は当時の19世紀中旬の人物と裸婦。背景は水浴する女。

前景と背景はスムーズにつながらない。

恐らくその理由は、水浴する女と前景の人物達との【遠近感の表現上の破綻】だ。水浴の女はもう少し離れた描き方で無いと、距離感が明らかにおかしいのだ。

しかし、これはマネにとっては了解済みの表現なのかもしれない。それは【ジョルジョーネの画面合成】を理解していた可能性があるからだ。

つまり、マネもジョルジョーネと同じ【画面合成】を行なっているようなのだ。



《田園の合奏》

1509



《草上の昼食》

1863

【この表現方法は両作品の共通点】だ。

- ② しかし、ジョルジョーネの前景の田園風景は、実は【天上界】という設定だ。対してマネの作品の場合、男たちと裸の女のいる前景は

【地上界】そのものなのだ。

ジョルジョーネ作品の場合、ストーリー上で前景と背景は繋がっている。つまり、背景の牧童が弦楽器を演奏し始めたのに合わせて、天上界のメンバーが演奏を始めようとしている情景だ。

しかし、【マネ作品の場合、前傾と背景にスムーズにつながるストーリー要素がない】のだ。

この作品を見ている側からは、その関連性が全く不明なのだ。

何故水浴の女がいるのか。誰も分からないのではないか。

マネが、最初は《水浴》という題名をつけたが、1867年に《草上の昼食》に題名を中途変更した事実から推測して、《水浴》に重い意味があったとは考えられないのだ。

結論として、作品構成においては、ジョルジョーネの方がはるかに優れていて、マネの作品は、ジョルジョーネのオリジナル作品にある緻密な計算によるストーリーの優秀性を越えられていない。

マネのジョルジョーネ作品への理解が中途半端ではあるものの、【画面合成という作品に隠れた構成上の秘密には肉薄できている】ことは確かだ。

しかし、一方でジョルジョーネ作品の【追悼画という本質的要素】をマネは理解できていなかった為、マネの《田園の合奏》へのオマージュ表現として、中途半端な上に、ジョルジョーネにとっての故人への追悼画という本質に対して侮辱的な内容になったと理解できる。

同じ裸体でも、ジョルジョーネは【天上界のヴィーナス】であるが、片やマネは【地上の裸婦】を描いているのだ。

【故人への追悼画】を描いたジョルジョーネから見ると、マネの《草上の昼食》は、【ジョルジョー作品への冒瀆】と映るに違いない。

つまり、究極のところ、マネの《草上の昼食》はジョルジョーネの《田園の合奏》への【オマージュには相応しくない作品】という位置付けになる。

結論として、マネはジョルジョーネの《田園の合奏》の内容を正しく理解していなかった。

つまり、その作品への理解度は中途半端であり、正統なジョルジョーネへのオ

マージュ作品絵は無かったのだ。

しかしながら、例えそれが真実であっても、当時の人たちにとって、【現実の場面で、現実の娼婦らしき裸の女と共に昼食をとる正装の男達がいる場面の絵画】は、スキャンダラスな要素において注目度が高かったのだろう。